博物館でハチを観察 ～特別展に向けて奮闘中！～

半田　宏伸

はじめに

自然の博物館の企画展示室では年間２回の展示替えを行い、合計３つのテーマの異なる展示を行っています。そのうちの１回は特別展として、展示図録も作成しています。

来年度（平成３０年度）の特別展は、夏季に「ハチ展」が予定されています。正式なタイトルは未定ですが、ハチの種の豊富さや暮らしの多様さ、面白さについて、皆様に知っていただけるような展示にしていきたいと考えています。

そこで今年度は、展示に向けて様々なハチ関係の資料を収集しています。ハチの資料収集といえば、もちろん採集して標本をつくるということも大切なのですが、写真資料もハチの面白い生態を紹介するために欠かせません。そのため、県内を中心にハチの写真を撮りつつ、実物も採る日々を送っています。

今回はその活動の中でも、写真資料を集める過程で、博物館の敷地内で観察したハチたちについてご紹介します。

博物館の壁のハチ

博物館の外壁には､様々なハチが飛んできます。このハチたちは何をしているのでしょう？

ハチの仲間には、木の表面などに開いた穴に巣を作る種類がいます。既に開いている穴を利用するハチを借孔性のハチと言います。博物館の壁面には小さな穴がたくさん開いており､ハチたちは、この壁の穴の中に巣を作りに来ているのです。飛んでくるハチには、ドロバチの仲間やジガバチモドキの仲間が見られます。さらに、これらのハチに寄生するセイボウという寄生蜂の仲間もやってきます。セイボウは「青蜂」と書き、全身が青色や緑色をした金属光沢で包まれたハチです。非常に美しい昆虫なのですが、１ｃｍ未満の種類が多く、素早いので見つけるにはコツがいります。加えて、日差しの強い晴れた日の、日当たりのよい場所に飛んでくるため、写真撮影は一苦労です。

日差しの強い中で、壁に来るハチを待つ（左）
穴の様子を伺うエゾジガバチモドキ（右）

竹筒にやってくるハチ

敷地に設置した竹筒

竹を束ねて吊るす竹筒トラップという方法を使うと、借孔性のハチが巣を作る様子を観察することができます。竹を 20ｃｍ程度に切りわけまとめて、軒先などに設置することで、筒の中にハチが巣を作りに来てくれるのです。巣の前で待っていれば、ハチが巣にエサや巣の材料となるものを運び込む姿が観察できます。

巣材に葉を運びこむバラハキリバチ（左）
巣材に泥を運び込むオオフタオビドロバチ（右）

おわりに

来年度の特別展では、こうしたハチたちの多様な生態写真に加え、たくさんの実物標本を展示していきます。中には、普段近寄ることのできないハチの巣の実物や、宝石のように輝くハチ、体長わずか数ｍｍの小さなハチなど、普段目にすることのないような様々なハチの一面を紹介していきたいと考えています。ご興味のある方は是非ご来館ください。

（はんだ　ひろのぶ・学芸員）